癒しの小川に安全な水を

沖縄県　宜野湾市立真志喜中学校　二年　平良　柊翔

水は、僕たちが生きていくために必要不可欠なものであるということはもちろんのことだが、水の役割は、それだけではない。多くの人々の癒しや趣味のためにも、とても重要な存在となっている。例えば、昔から雨の降る音が好きだという僕の祖母は、雨の降る音が好きだという僕の祖母は、雨の降る日は、家の屋根や窓に雨が打ち付ける音が癒し効果となり、その音を聞きながら眠れる日は、寝つきが良くなり、朝もすっきりと、目覚められるのだという。また、写真を撮ることが好きな母は、雨の雫がついた草花を撮ることを楽しみにしていたり、雨が止んだ後の水溜りに映る景色を撮ることを楽しみにしていたりと、水があるからこその趣味がある。そして僕自身も、波が砂浜に辿り着く様子を見るのが好きだ。強く堂々と「ザザザー」と迫力のある音を立てながら砂浜に辿り着く波も、弱く控えめに「チャプンチャプン」と優しい音を立てながら静かに砂浜に辿り着く波も、どちらの波にも魅力があり、癒やされる。

そんな僕には数年前まで、海以外にも水に癒される場所があった。それは、わかたけ児童公園。地域住民からは、通称カメ公園として親しまれ、その中央には大きな池があり、端の木陰の方には、小川がある。僕はその小川が大好きだった。遊び疲れて、少し休憩する時には、ひんやりと冷たい小川に足を入れて疲れを癒した。小川の水は、入れた足の指一本一本がくっきりと見えるほど澄んでいて、そこには小さな魚やエビが生息し、小川の水に擬態するかのように半透明の身体をしているが、それでも子供達にすぐ見つかるほどに透き通っていた。昼間は公園で遊ぶ子供達の賑やかな声にかき消される、ささやかなせせらぎの音はまだ公園が静かな早朝だと、耳を澄ませば、わずかにチョロチョロと聞こえてくる。僕はその音が聞こえる時間が大好きで、まるで小川と僕との特別な時間のような気がしていた。

僕の癒しが詰まったその小川は、ある日突然ロープが張られ、看板が立てられ、立ち入り禁止になった。「立ち入り禁止。水質調査中のため、中で遊ばないでね」看板にはそう書かれていた。

突然癒しの場所を取り上げられた当時の僕は、怒りにも似た悲しい気持ちを、どこにぶつけていいのかもわからず、何日も落ち込んだのを覚えている。

立ち入り禁止の原因には、僕が住む宜野湾市にある米軍普天間飛行場が大きく関わっていた。有害性が指摘されている、有機フッ素化合物ＰＦＯＳやＰＦＯＡなどを含む泡消化剤が、米軍普天間飛行場から宜野湾市内の河川などに流出し、基地外の広範囲で水質の汚染が確認されたのだ。市内の複数の湧き水も全て使用が禁止され、湧き水を利用した池や小川のある公園もそれぞれ使用禁止となり、カメ公園もそれに含まれた。カメ公園から検出された有機フッ素化合物は、国の暫定指針値の、なんと十三・八倍という高濃度だったそうだ。

その後しばらくして、カメ公園の小川や池から水が抜かれ、その場所は僕が毎日のように通ったあの頃とは、すっかり姿を変えてしまった。なぜ米軍基地近くの住民は、いつまでも理不尽な悲しみや苦しみに耐えなくてはいけないのだろう。僕たちはただ自分の好きな街で、安全に幸せに暮らしたいだけだ。

カメ公園から水が消えて約三年。嬉しい話を耳にした。近所の公園に、有機フッ素化合物を除去できる浄化施設が設備され、その公園では小川に水が戻ったそうだ。僕の癒しだったあの場所に水が戻る日も、そう遠くはないのかもしれない。

僕たちが生きていくために必要不可欠であり、多くの人の癒しや趣味のためにも重要な存在である、大切な水。その水が、いつまでも安全であることを願う。